

第1回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会	
日時	平成29年6月5日(月)
開催場所	横浜市開港記念会館 6号室
出席者	池田 典義、岸井 隆幸、坂田 宏、水谷 初子、保井 美樹、若松 浩文、 涌井 雅之、和田 新也、渡辺 真理、町田 誠、綱澤 幹夫
欠席者	隈 研吾、坂井 文、須磨 佳津江、福岡 孝則、三輪 律江
開催形態	公開(傍聴人4名)
議事	(1) 委員長選出等 (2) 現状の把握 (3) 検討の視点 (4) その他
資料	議事次第 資料1: 旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会条例 資料2: 諮問書(写) 資料3: 委員名簿 資料4: 席次表 資料5: 第1回委員会資料

議事内容

1 委員長選出等

【事務局】

- ・これより議事に入らせていただきます。まずは、委員長選出及び職務代理者の指名でございます。委員会条例第6条2項の規定により、委員長は委員の互選により選出することとなっております。委員長のご推薦がありましたら、お願い致します。

【和田委員】

- ・2005年日本国際博覧会「愛・地球博」の会場演出総合プロデューサーを務められ、かつ著名な造園家でもある涌井委員を委員長にご推薦したいと思っております。

【事務局】

- ・ただ今、涌井委員の名前が挙がりましたが、ご異議ございませんでしょうか。

【委員】

(異議なし)

【事務局】

- ・それでは、異議が無いようでございますので、涌井委員に委員長をお願いしたいと思います。涌井委員長、ご挨拶をお願い致します。

【涌井委員長】

- ・委員長に就任致しました涌井です。宜しくお願い致します。先ほど渡辺副市長がおっしゃられたように、75日間の会期で500万人の目標をはるかに上回り、大変な盛況で全国

都市緑化よこはまフェアが、昨日閉会を迎えたことにお祝いを申し上げます。横浜の魅力や市民の意識をどのようなレガシーで、首都圏の中でも重要な拠点となる240haという平坦な土地に、どのような土地利用をいざなっていくか。この前提となる国際園芸博覧会招致をどう成功させていくのかについて、委員をはじめとする様々な意見を取りまとめながら市長に答えを示していきたいと思っております。ぜひ、忌憚のない様々な知見や意見を頂戴して招致に寄与できればと思っております。

【事務局】

- ・委員長には委員会条例第6条4項の規定に基づきまして、委員長の職務を代理する委員をご指名いただきますようお願い致します。これより先は、委員会条例第6条3項の規定により、委員長には議長として議事の進行をお願いしたいと思っております。それでは、涌井委員長、よろしくお願い致します。

【涌井委員長】

- ・委員長代理については、大変お忙しいと思っておりますが是非とも都市問題に精通されている岸井委員をお願いしたいと思っております。

【岸井委員】

(了解)

【涌井委員長】

- ・ご了解を頂きましたので、それでは議事次第に沿って進めていきたいと思っております。「議題2・現状の把握」を事務局から説明頂きます。

2 現状の把握、検討の視点、その他

【事務局】 (資料5-1、5-2の説明)

【涌井委員長】

- ・市の現況と課題、旧上瀬谷通信施設の概要を説明して頂きましたが、これについてご意見はございますか。このあとに検討の視点について改めて説明をしてもらいますので、それが終わった段階でまとめて意見を言っていただいても結構です。

(意見なし)

- ・それでは資料5-3の検討の視点について説明して頂きます。

【事務局】

(資料5-3の説明)

【涌井委員長】

- ・検討の視点についてご説明頂きましたが、今回は第1回目ですので皆様に横浜市の実況と抱えている課題について、ポジティブなブレイクスルーを与えるであろう国際園芸博覧会について我々の論点は何かと言うと、どのようなコンセプトあるいは哲学をもった博覧会を開催するかということや、それをわかりやすく伝えるテーマ設定について考えて頂きたいと思っております。同時に博覧会のテーマと言うのは、横浜市の市政が抱える課題と表裏一体です。この点をふまえてご質問、ご意見を頂戴できればと思っております。ちなみにこの国際園芸博覧会はBIE(博覧会国際事務局)とAIPH(国際園芸家協会)の両方から認定を頂くA1

という非常にクラスの高い博覧会を目指しています。今回の委員会にはAIPHの副会長をされていた和田委員がいますので様々な形で内部事情を含めて議論できると思います。博覧会は世界各国が開催したいというニーズがあるので、早めのスケジュールでどのように具体的に参加表明をしていくのが重要になってきます。そのような点もふまえて意見交換できればと思います。愛・地球博でご活躍いただいた若松委員が11時に退席されるので、ご意見を伺いたいと思います。

【若松委員】

- ・今回の上瀬谷の現場を先日見させていただきましたが、実際に見てみてハード的な課題は様々ありますが、私は「時間消費の手法」というものが考えられると思います。体験性や滞在性など色々な方法があると思いますが、様々な世代の方たちが緑に触れ合っただのような時間を豊かに過ごすのかというのを上手にショーケースにできないでしょうか。ただ歩くことや眺めるといったことにも色々な手法があると思います。観光農園や市民農園などの手法が今までに開発されてきましたが、まだまだ新たな手法があると思います。そのような新しいソフトができると提案型の博覧会になっていくのではないのでしょうか。

【涌井委員長】

- ・オブザーバーの行政の方々もご遠慮なく意見を頂ければと思います。それではお考えいただいている間に和田委員に国際園芸博覧会の各国の状況を説明して頂ければと思います。

【和田委員】

- ・園芸博覧会の各国の状況ですが、そもそも園芸博覧会はヨーロッパ発のものです。今、活発になってきているのがアジア圏の国々です。このアジア圏を活発にしたのが日本で行われた大阪、淡路、浜名湖の3つの園芸博覧会です。これらの園芸博覧会が大成功に終わったことが、アジア圏で活発になってきたという理由です。中国を中心として園芸博覧会を開催したいという声が大きいため、委員長がおっしゃったように早めに様々な手続きを行っていくことが非常に重要になってきます。また、開催した園芸博覧会は成功例が多いのでそのような点でも活性化してきていると言えます。
- ・私の意見として、AIPHとして各国の園芸博覧会を見てきた立場から申し上げますと、園芸博覧会にとって重要なのは、生物・植物を中心とした生命などの本物（リアル）の世界を示すことが大変重要です。バーチャルなものもあって良いと思いますが、しっかりとした本物の展示を示すことが園芸博覧会の優位性になると考えています。そのためにも生物をしっかりと設え、後世に伝えるためには非常に長い期間が必要になるので、2026年まで9年ありますが、準備などは今からでも早すぎないということをご理解いただきたいと思います。
- ・浜名湖花博以降、AIPHは博覧会の開催後、その地域や社会にどれだけ寄与するかを重視しています。AIPH規則にもあるように園芸の社会的必要性やその環境とを結びつける上で果たす役割を園芸だけでなく、緑といった広い意味で捉え、緑・園芸が社会に対する必要性、ミッションは何かをしっかりと後世に伝えていき、博覧会以降どう変わっていったかをしっかりとみていくことが大事であると組織内では言われています。
- ・3点目は少し現実的すぎてここで申し上げるべきかわかりませんが、失敗例の原因の1つ

は、理念などを定めた担当責任者が役所の人事問題や政治問題などで変わってしまうことです。事業が遅れたとしても同じ責任者が一貫しているところでは、しっかりと間に合わせていて成功に終わっています。人事的に難しい所もあるかと思いますが、理念と責任の所在をしっかりと引き継いでいただければと思います。

【涌井委員長】

- ・ありがとうございます。その他いかがでしょうか。

【保井委員】

- ・3点質問させていただきます。1つは先ほどの説明にもあったように対象地で営農されている方が多いように思いますが、今はどのくらいの農家の方が営農されているのかということと、かなり高齢の方が多いかと思いますが農家の状況や民有地の状況をお伺いできればと思います。
- ・2つ目は通常、このような大規模な博覧会を開催した場合、民有地の部分は残して開催しているのか、それとも買収など何らかの手法で一体的に整えているのか、これまではどうだったのかをお伺いできればと思います。
- ・3つ目として博覧会はかなりのお金がかかると思いますが、通常の官と民の負担割合はどのようになっているのでしょうか。場合によると思いますがどういう割合になるのか一般的な例で構いませんので教えて頂けないでしょうか。

【事務局】

- ・1つ目の質問ですが、資料5-2の24、25ページをご覧ください。25ページで土地利用の状況をご説明しますと、図の黄色になっている部分が国有地、濃い緑色が民有地、オレンジ色が市有地（主に農道）になっています。濃い緑色の民有地が全体のうちの110haありますが、そのうちのほとんどが農地になっていまして農家の方々が約250名いらっしゃいます。土地利用の意向ですが、引き続き営農をしたい方、違う用途の土地利用を検討されている方、検討途中の方がそれぞれ1/3程度となっています。
- ・2つ目の質問ですが、一般的にこれまでの博覧会では様々な状況があったかと思いますが、大阪花博では鶴見緑地という公園を使っていました。上瀬谷については民有地と公有地が半分ずつありますが、今地元の皆様には、「国有地を中心に博覧会を検討していきます。」と説明しております。
- ・3点目でございますが、直近で参りますと2025年の大阪新万博に関して、4月11日に閣議了解がされておりました、その中に資金についても書かれています。大阪新万博は登録博、国際園芸博覧会は認定博に当たりますので、これがそのまま適用されるわけではございません。まず会場運営に関しましては、入場料から賄うことになっておりました基本的には独立採算でございます。会場建設に要する費用については、いわゆる公共事業、補助事業で行うものに関しては全体の2/3程度とし、残りは民間資金、自治体等により対応するものと言われております。会場また、博覧会の開催に関連する公共事業、いわゆる基盤整備については現状や将来的な見通しもふまえて都市計画等に基づいて事業を行うことになっています。

【涌井委員長】

- ・私の方からも少し答えさせていただきますと、今ご質問いただいたことがコンセプトなり、博覧会の基本構想に関わってきます。1番重要なことは、博覧会を開催することありきということよりも、上瀬谷の地域を横浜の都市構造を考えたときにどう位置付けて、その中で博覧会を開催することがどのような効果をもたらすのか。その結果、どのような用地において、将来、都市公園なり永続的な土地利用を図るのか、または一部民有地を賃借して博覧会会場にするのか。事業収支についても公共事業で行う部分と民間の企業が進出する部分があります。いずれにしても我々が考えなくてはいけないのは、2050年の長期的なスパンの中で横浜がどのように変わるべきなのか、あるいは横浜市の中で上瀬谷を戦略的にどのような役割を果たしていくのか、MICE機能なり様々な機能に国際園芸博覧会がどう寄与するかが欠かせないのかなと思います。

【岸井委員】

- ・本日の参考資料に米軍施設の返還跡地指針がありますが、この中にもある通り、上瀬谷地区はかなり広い土地があって東側が国有地、西側が民有地となっていますが農地が中心の場所であるので、都市農業としてしっかりと農地を維持していくことは重要です。また広域的な利便性の高い場所ですから災害が起こった際に上瀬谷地区が関東地域の防災拠点として寄与することができるのではないかと思います。今回のテーマについても都市農業などが活用できると良いのではないのでしょうか。
- ・質問なのですが、2025年の大阪博や2020年のオリンピック・パラリンピックとの関連はあった方が良いのか無い方が良いのか、横浜市ではどのように考えているのでしょうか。

【事務局】

- ・大阪博は2025年に招致検討しており、現在様々な状況を見ると2026年が国際園芸博覧会の最速の年と考えます。横浜市としては最速の2026年に合わせて横浜市の基本構想案を作っていくと考えています。大阪博やオリンピック・パラリンピックとの関連付けについてもこの委員会の審議の中でご意見いただけるのであれば、考え方を示すことになると思います。制度上は2か年連続して博覧会を開催することは可能ですし、政府が最終的に決める際に横浜市としてどういう考えを示していくかを検討していきたいと思っております。
- ・現在大阪府市では2025年に博覧会の招致検討をしており、テーマを「いのち輝く未来社会のデザイン」としています。現在その年には大阪市の他に3都市が立候補をしまして、全4都市で競争をしているところです。これについては平成30年11月にBIEによって開催都市の決定がされると聞いています。

【涌井委員長】

- ・私の方からも質問させていただきますが、2026年という年が横浜市にとってどのような年になっているのかという発想で考えていく必要があると思います。例えば高齢化や日本全体として人口が減少することによって労働生産年齢人口が低下し、都市競争力が場合によっては弱まってしまいます。また、大きな産業基盤であるロジスティック拠点としての横

浜港が海外と格差がついてしまうという課題もあり、横浜市として新たな転換を模索することが重要になってきます。バックキャスト的な発想がないと将来にポジティブな影響を残すレガシーが重要です、そこが問われてくる気がしますが、この点について事務局はどのように考えていますか。

【事務局】

- ・ 2025年の「翌年」ということに意味があると思います。横浜市の「中期4か年計画」は、今年で計画の最終年になりますが、4か年を考えていくにはその先を考えなければいけないので、「未来のまちづくり戦略」ということで2025年を目標年として設定しています。象徴的に言えることが人口減少、少子高齢化が進み、超高齢化社会がいよいよ現実的になってくるということです。横浜市では100万人の方が65歳以上になると予想されています。

【涌井委員長】

- ・ 町田課長はいかがでしょうか。

【町田課長】

- ・ 2026年は今年から9年後ということになりますが、目標をどのように設定していくかという話と上瀬谷通信施設の跡地としての土地利用の状況からしてみると、かなりタイトなスケジュールだと思います。参考資料の中の他都市の事例を見てみますと、1990年に大阪で行われた博覧会では70年代に開園された鶴見緑地を会場にしており、もともとある基盤を活用したものでした。次の淡路花博でも、国営公園として工事を進めている場所を会場にしていたし、浜名湖花博でも都市公園事業で整備を進めていた会場を使用していたということで、最初の計画段階で会場があったということがあります。一方で、愛・地球博では2005年の開催の15年前に別の会場で開催するという地域整備計画を作成していましたが、開催の5年前にその計画が頓挫してしまいました。代替会場として選ばれたのが、当時、公園ではなかったものの愛知青少年公園という場所での開催に落ち着いたという経緯があります。
- ・ そこで今回の上瀬谷地区を見てみますとこれまでの開催地と違ってそのような状況に至っていない240haという広大な敷地なので、国有地を中心に整備を進めると計画されていますが、地域の整備計画とうまく連動しながら計画できることが理想的ですが、愛・地球博の例をみると地域整備計画と連動しないやり方も他方ではあると思います。つまり、2026年という年に合わせて開催しようとするのであれば、会場となる土地を確保するという進め方もあり得るのではないかと思います。理想は将来のまちづくりを見据えて計画づくりをしてほしいですが、現実的なことも考えながら進めて頂きたいと思います。

【涌井委員長】

- ・ 事業構造として都市計画的な決定をして確定した土地利用の中で計画を立てられると良いが、時間がないのでコンセプトや土地利用の計画と、都市構造の中における土地利用なり上瀬谷地域が担う都市的な機能について、それぞれ暫定的でも構わないので考えておき、平行して進めていかないと遅れてしまう可能性があるという指摘でした。
- ・ 事務局からの説明でインバウンドが72万人とありましたが、とても少ないと感じます。

その点について、水谷委員いかがでしょうか。

【水谷委員】

- ・インバウンドの観点からは、東京で宿泊が出来ないから横浜の様に、「東京があつての横浜」とみられていると感じます。今回の博覧会についても、大きな意味で横浜のブランディングをどのように考えていくかが重要になってくると思います。横浜自体をインバウンドから考えたときに世界に向けてどうアピールするかが大切です。横浜としてアピールするのか、関東圏での横浜としてなのか。また、横浜の認知度が博覧会をきっかけにして飛躍していくとすると、現在はみなとみらいを中心とした横浜が世界には認知されていますが、臨海部だけでなく、市内を周遊して頂く手法として園芸博覧会を検討して頂けると良いのではないのでしょうか。
- ・和田委員から本物（リアル）を示すというお話がありましたが、インバウンドの観点からすると観光客の方は本物（日本であれば日本文化）に関心を持たれて来られるものの、最終的には人との交流が記憶に残って戻ってくる方が多いと言われています。したがって、示すだけでなく交流の拠点やしかけを考えていくことが横浜市のブランディングにも繋がっていくと思います。

【池田委員】

- ・2026年は9年後になりますが、それまでにあれだけ立派な緑と広大な土地をどう利用するかということが大切で、なおかつ園芸博覧会が閉会した後どのようなレガシーを残すのかということ踏まえた概念で進めていく必要があると思います。
- ・横浜商工会議所として申し上げますと、先ほどのインバウンドが極端に少ないということについて、例えば高島屋は横浜店が日本で一番の売上をあげていますが、インバウンドに対する売り上げは最低です。つまり、宿泊観光客数が少ないということです。「コト」を行って横浜の宿泊数を増やすことが大切で、国際園芸博覧会がこの起点になればと思います。あくまで経済政策の観点から見てお願いしたい点です。

【坂田委員】

- ・園芸の視点からお話しできればと思います。全国都市緑化よこはまフェアは大成功に終わりましたが、要因として妥協の無い取り組みで進んでいた点が一番大きかったと思います。みなとガーデンと里山ガーデンという2つの会場で行われましたが、改めて都市部と里山の緑化のあり方が違うということ強く感じました。目指している園芸博覧会は6か月間という長い期間、花を保たなければなりませんので、地植えでの植栽が重要になってくると考えております。
- ・園芸が持つ可能性というものは、先ほど委員長からもお話があったように人口減少や高齢化といった課題の解決に役立つと考えています。ライフスタイルに花を取り入れることで心の余裕に繋がります。体を動かし花に触れることで楽しむことや収穫体験を楽しむこともできればと思います。園芸を楽しむことでコミュニケーションを生み、世代間の断絶の解消、あるいはコミュニティーの再構築といったことが期待され、都市の課題の解決の糸口になるのではと思います。東日本大震災の仮設住宅では花を育てることでコミュニティー

一の形成に役立っている事例もありますので、園芸の役割は改めて大きいことだと思います。

- ・しかし日本はヨーロッパなどと比べますとまだまだ園芸文化は根付いていないと思います。言い換えますと、今後さらに伸びていく余地があります。
- ・大阪花博のときにはガーデニングブームを起こしましたがけれども、当時の花博は会場に欧米の博覧会をそのまま取り込む形で花を持ち込んだわけですが、実際には持ち込んだ花が日本の環境に適合せずに継続的に観賞できないということがあったと聞いています。
- ・日本では四季があり季節に適した花を植える必要があるということをなによりも認識してほしいです。今後横浜での園芸博覧会を考えた際には四季をしっかりと考えて頂ければと思います。屋外の地植えによって、自然の四季を楽しめるようなコンセプトが重要ではないかと思います。
- ・園芸の文化を情報発信する場にしていければと思います。江戸時代、園芸は庶民の文化でした。古いものを大切にしながら、かつ時代にフィットする庭作りや園芸の楽しみ方を来場者が学べる場とし、改めて日本の園芸文化を世界に発信できると良いと思います。

【涌井委員長】

- ・多摩の田園都市を見てみると子育てを終えた家族の間では園芸店やペットショップが流行っています。つまり、花や犬や猫が夫婦のかすがいになるのです。ある一定の年齢になったときに、家族関係を維持していくためにも園芸は必要になってくると思います。
- ・私が疑問に思っているのが、昔の横浜のブランドが薄れてきている。昔の方が横浜のブランド力は高かったのにだんだんとそのブランドが薄れてきています。園芸についても同じように、江戸時代は西洋の人たちが驚くくらいであったのに、だんだんと希薄化してきてしまっています。このような問題をもう一度新しいコンセプトとして、22世紀を見据えた新しいライフスタイルを提案できないでしょうか。例えば、経済的な成長だけでなく、成熟した社会が心に平穏をもたらしており、その要因として園芸があることが重要であるということを伝えてみてはどうでしょうか。あるいは第2次産業革命として発達したICTやIoTなどは園芸と非常に相性が良いです。先端産業が立地する土地には緑や花が密接にあるところに位置しています。ストレスの緩和にもなるので生産性の向上にもつながります。第4次産業革命も見据え、そのようなことも絡めて議論が出来ればと思っています。

【岸井委員】

- ・今回開催する意味を検討しているわけですが、横浜市は1926年頃には関東大震災からの復興で都心に公園整備を、1976年頃には郊外部に港北ニュータウンを建設しグリーンマトリックスのシステムなど新しい街と緑との関わり方を提案してきました。そこで100年経った2026年に我々は何を提案していくのかを考える必要があります。今までお話があったように、高齢化社会の新しいフレームを創るあるいはICTなどを活用して高齢化社会の課題を解決していく、こうしたテーマは当然考えられると思います。しかし、それだけだと日本のみのストーリーであって、世界では勝てないと思います。単に高齢化社会の解決のためだけではなく、例えば都心とニュータウンと農村地域が連携して、新しい雇用・都市と農業との関係を生み出すといった大きなストーリーが必要であると思います。

- ・上瀬谷付近には東名高速もありますが、そのうちリニア新幹線が橋本にきます。そのような中で、ICTやIoTを意識したこともやらざるを得ないし、やるべきだと思います。

【涌井委員長】

- ・大変重要なご指摘をいただいたと思います。国内あるいは地域に特化した事情と使命に対して、国際的な課題とのマッチングを示していく必要があります。

【渡辺委員】

- ・上瀬谷は桜がきれいで田園風景もあって素晴らしいところで、もし9年後に博覧会が開催されたら一市民、一消費者として良い思い出になると思います。その前に、「成功する博覧会とは」とありますが、これまでの博覧会で成功した博覧会と失敗した博覧会とはどのようなものでしょうか。

【和田委員】

- ・成功や失敗とは掲げた理念や目的、博覧会后どうなるかをしっかりと見据えて博覧会を展開していくことにかかってくると思います。例えば1000万人の入場者を見込んでいたが実際は800万人であったとしても、開催したことの社会的影響が掲げた目標を達成していれば成功だと思います。期間中の成功とそれ以降の社会やまち、地域全体への影響が目論見どおりであるかが基準になるかだと思います。
- ・逆に明らかな失敗と言うのは、入れ込みが少ないことやその後のまちが荒れてしまうということですが、園芸博覧会では少ないです。

【涌井委員長】

- ・成功と失敗の基準はなかなか難しいもので、愛・地球博では、一切、動員型にはせず、市民参加やボランティアなどの協力による体験型で通しました。結果として、のべ人数は目標を上回りましたが、絶対数では下回っていました。つまり繰り返し来場したいという方が多かったということです。動員数を増やす量的な成功ではなくてリピーターを増やすことや後にライフスタイルにポジティブな影響を明らかに残したという2点が成功の要因として挙げられます。このことが国際博覧会事務局から称賛を頂くことになりました。今の時代に成功したというモデルと10年後に成功したモデルは違うのかもしれませんが、こういった点について、各都市で開催している博覧会に出展している農林水産省としては、いかがでしょうか。

【綱澤室長】

- ・日本の花きの品質は最高のものであると考えています。昨年開催されたトルコでの国際園芸博覧会でも多くの花が金賞や銀賞を受賞しています。博覧会への出展により日本産の花きを世界に向けてアピールし、その結果として需要が伸び生産の増加につながることで、成功と言えると思います。

【保井委員】

- ・これまでの話と重なる部分がありますが、この上瀬谷地区で営農されている方が多いということで、博覧会のテーマとして「農」を取り上げない理由はないかと思います。このような農に絡んで食料や生命などがあると思います。また、涌井委員長の提案のように新しい技術をこれからの暮らしに照らし合わせたときに、私たちがこのような技術をどう使っ

ていくのかを問いかけながら、世界的に農のある暮らしを提案していくと良いのではないのでしょうか。そのような博覧会を開催するのであれば公有地だけではなく、まさに営農されている民有地もあるということは好転機になると感じています。

- ・私は都市計画を専門としていますが、「つくって終わりで、後の人のことを考えないということをやめましょう」と色々な方に話をしています。博覧会に至るまでの整備と閉会後の跡地利用という2つのプロセスがありますが、そのような考えをひっくり返すようなメッセージを発信できないでしょうか。博覧会のために整備した会場を見てもらうのではなく、逆に会場が出来ていくプロセスを見てもらったり、一部を市民に担ってもらうと、若松委員がおっしゃっていた体験型の仕掛けも作れるのではないのでしょうか。四季折々の花を見せていくという話もありましたが常に咲いている必要はなく、これから花を植えていく段階や途中の段階を見せることが強みになるような会場構成にできないでしょうか。

【涌井委員長】

- ・最後にこれから検討を進めていく上で岸井委員と町田課長に伺いたいのですが、コンパクトシティや機能集約型都市などが言われていますが、他方で農住都市やアグリカルチャーを中心とした都市づくりの可能性もあると思います。あるいは、マルチハビテーションとしてコンパクトシティの中で週3日は都市部で、残りを農住都市で生活するという考えもあります。また、国では都市緑地法を改正しましたが、そのような中で従来の都市農地とは違った扱いがされるようになってきました。今後そのようなまちづくりの可能性はどのくらいあるのでしょうか。

【町田課長】

- ・まず今回改正した都市緑地法は市街化区域の中の農地についてです。もともと2年前に都市農業振興基本法、昨年都市農業振興基本計画を策定し、行政でも都市と農の共存を取り上げてきました。一方で、上瀬谷地域は市街化調整区域で本格的な農地ですが、都市近郊の住まい方や生活の仕方のスタイルという意味で、こういったモデルを見せていくのかは1つの大きなテーマになるかと思います。
- ・愛知万博でも会場の移設問題があったからこそ環境に注目することができましたし、淡路花博も関西国際空港などの埋め立てのために大規模に土砂採取された跡地に作っています。鶴見緑地も元々はごみの山からできたものです。これまでの博覧会会場の経緯をみますと、その土地のストーリーがあり、その土地の履歴を踏まえたテーマが決まっています。

【岸井委員】

- ・高齢社会になって健康で長寿を楽しむことが重要になってきました。そのためには社会とのつながりを持たなくてはならないし、交流場所として近郊の農地あるいは園芸地が効果を発揮するだろうと考えられます。都市農地が一大産業になりうる為のプロセス事例としてやってもよいと思います。
- ・また、1つの場所だけで行う博覧会がいつまで続いていくのかと思っています。港北ニュータウンや山下公園などの臨海部の緑も博覧会の一部であるという認識を持って新しい博覧会にしていくことも良いと思います。

【涌井委員長】

- ・今回の全国都市緑化よこはまフェアの成功を考えてみても、会場がネットワークされていることは魅力であり非常に有効でした。

【渡辺委員】

- ・ストーリーがあってその土地に即したテーマがあり、それを海外に発信することも大事という話がありましたが、上瀬谷は米軍接收地であったことを踏まえると上瀬谷地域に平和があること、上瀬谷で平和を堅持するということは世界に発信するメッセージとして意味を持つのではないのでしょうか。接收されていた場所で園芸博覧会を開催し、まちづくりをしていくというのが1つの発信になるのではないのでしょうか。

【涌井委員長】

- ・今日は、第1回の委員会と言うことで非常に様々な意見を頂けたと思います。この委員会は非常に急ぎ足のスケジュールになっているので、よろしければ次回の7月に向けて、委員の皆さんに博覧会のテーマ案がありましたらメモでも良いので是非アイデアを事務局に伝えて頂けると次回の資料作りに非常に役立つと思います。

【事務局】

- ・次回の委員会は7月10日（月）の10時から12時、瀬谷区役所での開催を予定しています。
- ・長い間のご議論ありがとうございました。以上で、第1回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会を終了します。